AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学フォーラム（2014.02）14巻1号:36～42.

旭川医科大学図書館所蔵「関場・鮫島文庫」の概要

藤尾 均

旭川医科大学研究フォーラム 14　：36 ～ 42，2013

依 頼 稿

旭川医科大学図書館所蔵「関場・鮫島文庫」の概要

藤　尾　　均*

鮫島夏樹氏

写真 1

関場不二彦氏

写真 2

写真 3

はじめに

「関場・鮫島文庫」は旭川医科大学が 2012 年 12 月に鮫島夏樹名誉教授（写真１）から寄贈を受けた医学関係古書籍などのコレクションである。本稿は、本学図書館貴重書室に保管されている同文庫の概要を、代表的古書籍などの写真とともに紹介したものである。

「関場・鮫島文庫」とは

旭川医科大学は 2012 年 12 月、鮫島夏樹名誉教授（元副学長・病院長・外科学第一講座教授）から、1400 点余に及ぶ医学関係古書籍その他の、貴重なコレクションの寄贈を受けた。このコレクションは、江戸時代に日本あるいは中国（明・清）で刊行された和漢書が中心であるが、古いものは安土桃山時代に遡る。また、オランダ語・ドイツ語・英語で記された洋古書や明治時代以降に刊行された日本語書籍も、合わせて 100 冊ほど含まれている。 さらに、このコレクションは、嵐山甫安（1633 ～ 1693）以来の外科の名門である嵐山家に代々引き継がれてきた、カテーテル・はさみ・浣腸器などの外科器具一式も含んでいる。

この文庫は、もとは、後述する関場不二彦（理堂、写真２）のコレクションであったことから、寄贈を受けた本学で、鮫島名誉教授の御意向も踏まえたうえで「関場・鮫島文庫」と命名した。

関場不二彦（理堂）の略歴

関場不二彦（1865 ～ 1939）は幕末に会津（福島）で生まれた。1882（明治 15）年に東京大学医科大学（現

*旭川医科大学　図書館長

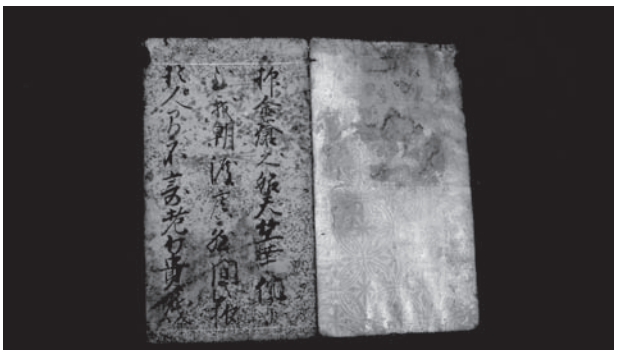

写真 4

写真 5

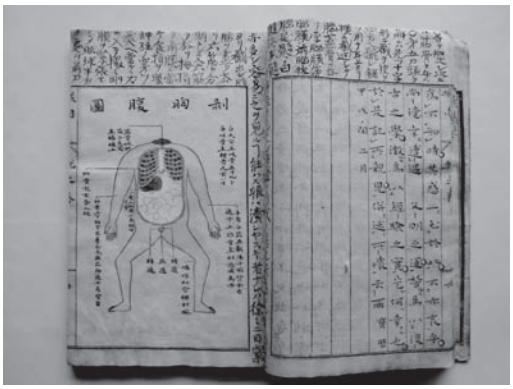

写真 6

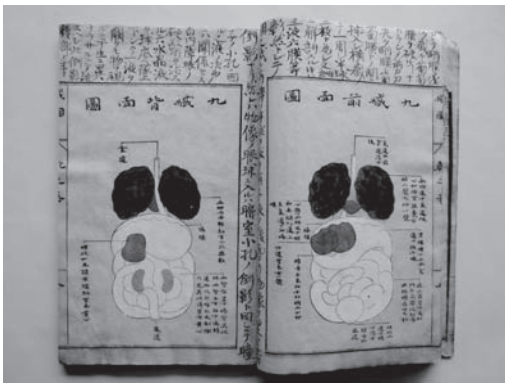

写真 7

在の東大医学部）に進学し、初代の外科教授スクリバに師事して俊才と謳われた。卒業後、スクリバの助手を経て 30 歳そこそこで北海道に渡り、札幌病院副院長となった。やがて札幌に関場医院を開業、これが発展して北海病院、さらに北辰病院となった。北辰病院は現在の札幌社会保険総合病院の前身である。病院運営のかたわら北海道医師会・札幌医師会の初代会長を歴任するなど、文字通り北海道医学界の重鎮であった。極めて煩瑣な日常業務のかたわら医史学者としても活躍し、著書に『西医学東漸史話』（1933（昭和 8）年刊）などがある。蔵書家としても有名であった。理堂は彼の号である。

ちなみに、旭川生まれの作家三浦綾子（1922 ～ 1999）の小説に『塩狩峠』があるが、その「藻岩山」の章には関場不二彦に関する言及がある。主人公の永野信夫は、恋人で肺結核・カリエスを患っている吉川ふじ子の身を案じ、「札幌で一番の名医」に診せたいと望んでいる。

「おばさん、札幌で一番の名医と言ったら、どこの医者なんでしょうね。」

食事のあとの茶をすすりながら信夫が聞いた。下宿の主婦は五十過ぎた未亡人で、息子が小学校の教師をしていた。息子は今夜宿直で姿が見えない。

「あんた、永野さん、体がどこか悪いのですか」

驚いたように尋ねた。

「いいえ、ぼくは悪くはありません……」

信夫は言葉を濁した。

「それなら安心ですけど。この札幌には三十人以上も医者がおりますが、そりゃ何と言っても北辰病院の関場先生が評判いいですよ。」

即座に下宿のおかみは答えた。北辰病院の関場不二彦と言えば、だれも知らぬ者のないほど有名である。脈をとってもらっただけで、病気がなおるという患者もあった。

むろん、この叙述は三浦綾子の創作であり、会話そのものはフィクションであるが、「名医」「評判いい」「有名」などの語は関場不二彦の実像を十二分に反映していると思われる。史実に基づいた彼の生涯と業績を知るうえで現在もっとも入手しやすいのは、札幌社会保険総合病院の前院長である秦 温信氏による評伝『北

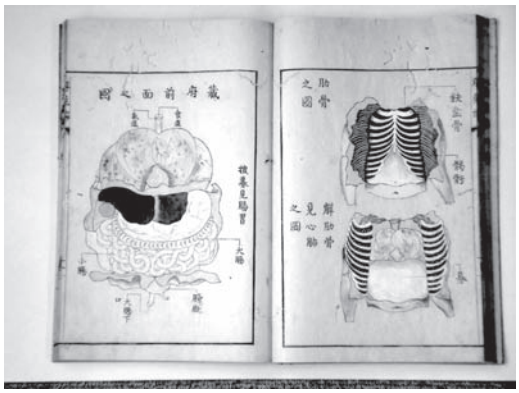

写真 8

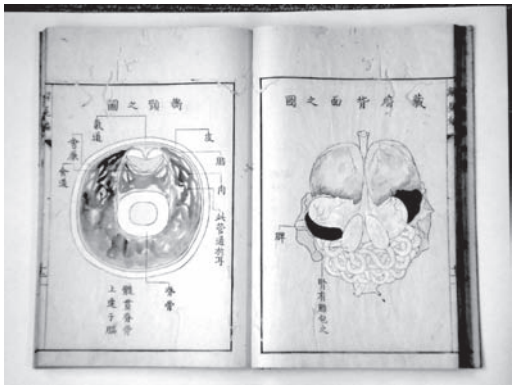

写真 9

写真 10

写真 11

辰の如く　関場不二彦伝』（北海道出版企画センター 2011（平成 23）年刊）である。ちなみに著者の秦氏は 2012 年 12 月に旭川医大で開催された「関場・鮫島文庫」オープン・セレモニーに出席され、そのわずか 2 か月後の 2013 年 2 月、急逝された。

本学への寄贈のいきさつ

鮫島夏樹名誉教授の御母堂が関場不二彦の義理の姪であった縁で、関場の死後、その蔵書の一部（主として医学関係の古書籍）は、夏樹氏の御尊父（関場龍水、元 北辰病院長）の所蔵となった。御尊父亡きあとは、それを夏樹氏が継承し大切に管理してこられた。しかし、夏樹氏の御親族にはこのコレクションを継承する御意志がないため、この度、夏樹氏が、長年にわたって自ら教育・研究・診療にあたられた旭川医科大学に寄贈してくださった。寄贈先として、北海道大学図書館・国際日本文化研究センター（京都）なども候補にあがったようであるが、最終的には、保存・管理用の貴重書室を新設する（写真３）など熱意を示した旭川医科大学を選んでくださった。深く感謝申し上げる次第である。

旭川医大が「関場・鮫島文庫」を所蔵できた意義

医学部をもつ日本の大学における、医学貴重書コレクションとしては、国立大学では医史学者富士川游（1865 ～ 1940）の旧蔵書から成る京都大学の「富士川文庫」など、私立大学では医事法制の大家であった山崎佐（1888~1967）の旧蔵書を収録した順天堂大学の「山崎文庫」など、新設医科大学では華岡青洲（1760~1835、後述）関係の文書に特化した旧 島根医科大学（現 島根大学医学部）の「大森文庫」などが有名である。「関場・鮫島文庫」は、それらと並び称されるべき貴重な「お宝」である。

旭川医科大学にとって 2013（平成 25）年は、開学 40 周年という記念すべき年であった、しかも翌 2014 年（本年）は、本学図書館が増築（総面積は約 960㎡）および既存部分全面改修に向けて動き出した年である。これらを前にした 2012 年に、本学図書館は国内外に誇れる貴重なコレクションを入手することができたわけであり、関係者の感慨もひとしおである。とりわけ、何世紀にもわたって日本の本州以南の伝統的医

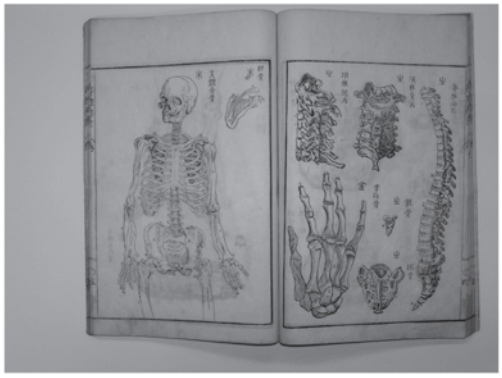

写真 12

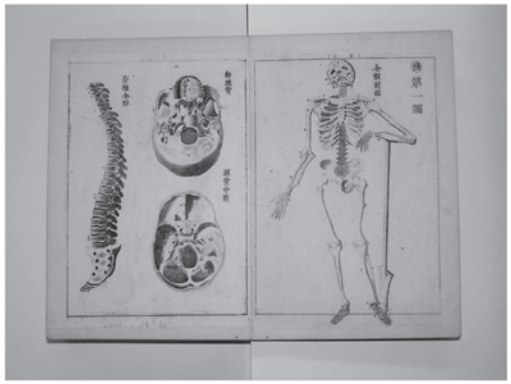

写真 13

写真 14

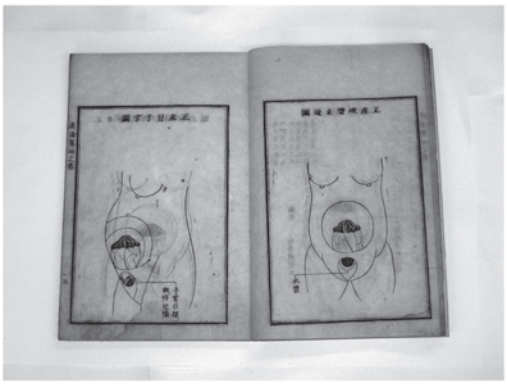

写真 15

療文化とは切り離されたかたちで医療活動が展開されてきた北海道の、しかも、歴史の浅い新設医科大学に、江戸時代以前の医学貴重書が多数集結した意義は大きい。今後、これらの貴重な資料は、教育・研究に生かすだけでなく、展示会などのかたちで広く地域社会に公開し、地域貢献にもつながるようにしていきたい。

「関場・鮫島文庫」の資産価値

「関場・鮫島文庫」所収の和漢書を、刊行された時期によって大まかに分類すると、

(1) 安土桃山時代～江戸時代最初期の書籍　数冊（和漢伝統医学関連）

(2) 江戸時代前半の書籍　200 余冊（ほとんどが和漢伝統医学関連）

(3) 江戸時代後半の書籍　900 余冊（ほとんどが西洋医学関連）

(4) 明治から昭和の初期までの書籍　200 余冊（ほとんどが西洋医学関連、活字印刷ハードカバー）

となる。

これらにつき、札幌市のある古書店に資産価値の見積もりを依頼したところ、コレクション全体で８桁の値段がついた。冊単位で見積もっても意味がないのでセット単位（たとえば、後述する有名な『解体新書』は５冊で１セット）でみると、１セット数万円程度のものから数十万円程度のものまでが大半である。しかし、一部に７桁台の値段のついたものもある。最も高価なものは、今からちょうど 400 年前、江戸時代最初期の 1613（慶長 18）年に吉益匡明が著した『換骨抄』である。吉益流の秘伝を記した処方録・薬物効能書のようなもので、「乾」「坤」２帖で１セット、新書判程度の大きさの、合わせてわずか 30 ページほどの、現代風にいえばパンフレットのようなものである（写真４・写真５）。

「関場・鮫島文庫」の概要

繰り返しになるが、この「関場・鮫島文庫」は、江戸時代の和漢書を中心とする医学関係貴重書コレクションである（ほかに前述の通り、洋書や外科器械一式があるが、ここでは紙数の都合で説明を割愛する）。和漢書については、鮫島名誉教授自らが編纂された『関場理堂文庫・和漢医籍目録および注解』（北海道医療新聞社 2006 年刊・非売品）に一応の紹介があるが、

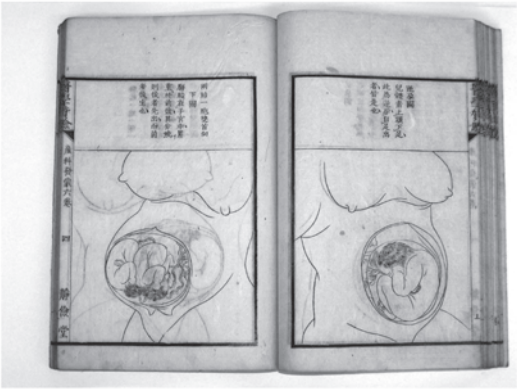

写真 16

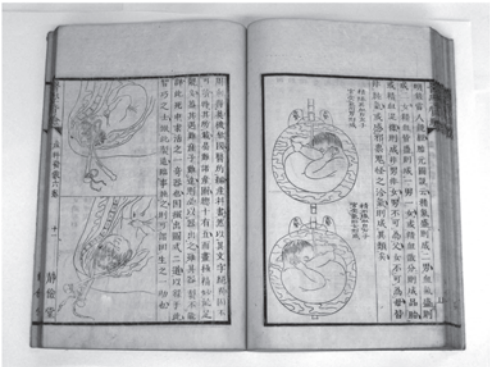

写真 17

写真 18

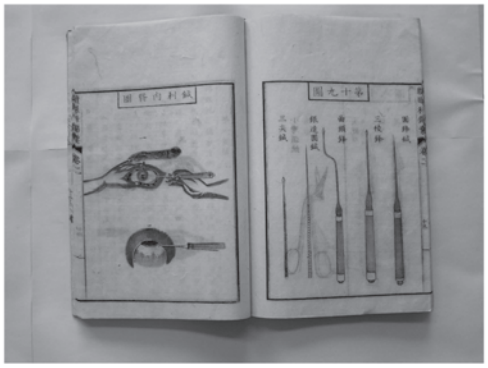

写真 19

同書に収録されていない書籍若干と、収録されてはいるが本学寄贈前に現物が行方不明になっているもの若干とがあり、この『目録および注解』には補訂が必要となっている。現在、その補訂作業が鮫島名誉教授の手により進行中である。

そのような事情もあり、全貌の詳しい紹介は他日を期し、ここでは、江戸時代後半（1750 年代以降）の和書のうち、医学史的に重要なものだけを紹介する。

1750 年頃～ 1800 年頃の重要和書

この時期に刊行された医学関係の和書は、主として解剖書である。医学史的にとりわけ重要なのは、①山脇東洋『蔵志』全 2 冊、②河口信任『解屍編』全 1 冊、③本木良意『和蘭全躯内外分合図』全 2 冊、④杉田玄白ほか訳『解体新書』全 5 冊、⑤大槻玄沢訳『重訂解体新書』全 14 冊であろう。

山脇東洋（1706 ～ 1762）は丹波（京都）の医家に生まれ、長じて伝統医学の古医方を学んだが、やがてその内景説に疑問を抱くようになった。 1754 年、幕府の許可を得て死刑囚を解剖し観察した。その成果を 1759 年に刊行した図録が『蔵志』全 2 冊である。これは本邦初のオリジナルな人体解剖書である（写真 6・写真 7）。

河口信任（1736 ～ 1811）は肥前（佐賀）唐津に生まれ、長じて長崎で南蛮流外科を学んだ。1769 年、幕府の許可を得て死刑囚を解剖し、その観察成果を 1772 年、『解屍編』全 1 冊として刊行した。これは日本で 2 番目に古いオリジナル人体解剖書である（写真 8・写真 9）。

本木良意（1628 ～ 1697）は長崎のオランダ通詞（通辞）の家に生まれた。長じて、オランダ商館医から入手したドイツ人レメリンの解剖書のオランダ語訳を翻訳（翻案）した。これは 1681 年に完成した日本初の翻訳（翻案）西洋解剖書であったが、刊行されず、永らく埋もれていた。約 90 年を経た 1772 年、周防（山口）の医師鈴木宗伝が、これを『和蘭全躯内外分合図』全 2 冊として刊行した。図版の多くがいわゆる立体解剖図譜になっており、この工夫が施されている日本最初の解剖書である（写真 10）。ちなみにヨーロッパでは、「近代解剖学の父」と称されるアンドレアス・ヴェサリウス（1514 ～ 1564）が 1543 年に刊行した『ファブリカ』（通例『人体構造論』と訳される）に、す

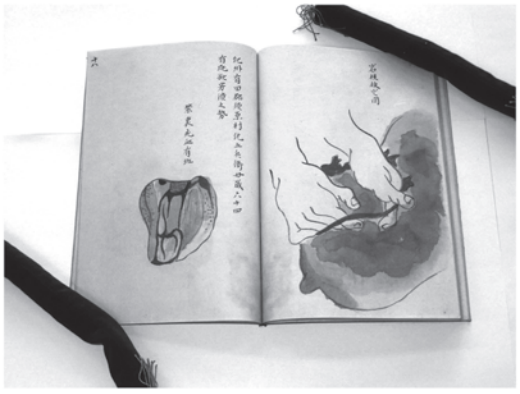

写真 20

写真 21

写真 22

でにこの工夫がみられる。

杉田玄白（1733 ～ 1817）は若狭（福井）小浜の医家に生まれた。長じて、オランダ語解剖書『ターヘル・アナトミア』の挿絵が江戸の刑場で実見した解剖体とよく似ていることに感銘し、前野良沢・中川淳庵らと相談して翻訳を決意した。そして 1774 年に刊行したのが『解体新書』全 5 冊である（写真 11・写真 12）。これが西洋医学普及の起爆剤となった。玄白の晩年の回想録に『蘭学事始』がある。

大槻玄沢（1757 ～ 1827）は一関（岩手）の医家に生まれた。長じて江戸に出て杉田玄白の私塾に学び、オランダ語は前野良沢に学んだ。玄沢の名はこの 2 人の師から 1 字ずつをとったものである。1790 年、玄白から『解体新書』の改訂を命ぜられて作業に着手した。改訂が完了したのは 1804 年であった。刊行はさらにはるかに遅れた 1826 年で、『重訂解体新書』全 14 冊となった。『解体新書』の木版画に対し、これは原本『ターヘル・アナトミア』と同じく銅版画である（写真 13）。

1800 年頃～幕末の重要和書

1800 年頃から日本の医学界は、内科・外科・産科・眼科などの分野に急速に専門分化していった。それに伴い、専門分化した医学書も続々刊行された。さらには、国民の識字率の急速な向上や外国からの脅威の増大に伴い、いわゆる「家庭の医学」関連や軍陣医学関連の書物も出回り始めた。また、幕末には外国との往来の活発化により海外からコレラなど感染症がしばしばもたらされたが、その対策のための書も現れ始めた。重要な和書として、①賀川玄廸『産論翼』全 2 冊（産科）、②片倉鶴陵『産科発蒙』全 4 冊（産科）、③杉田立卿『眼科新書』全 6 冊（眼科）、④本庄普一『眼科錦嚢』正続全 6 冊（眼科）、⑤華岡青洲『乳岩辨』（写本）全 1 冊（外科）、⑥平野重誠『病家須知』全 8 冊（家庭の医学）、⑦平野重誠『軍陣備要　救急摘方』正続 2 冊（軍陣医学）、⑧緒方洪庵『虎狼痢治準』全 1 冊（公衆衛生）を紹介しよう。

賀川玄廸（1739 ～ 1779）は出羽（秋田）横堀の医家に生まれ、長じて京都に上って産科医賀川玄悦（1700 ～ 1777）の弟子となり、後に彼の養子となった。1775 年、師の『産論』の不備を補った『産論翼』全 2 冊を刊行し、いわゆる賀川流産科の隆盛に貢献した。

ちなみに師の玄悦は正常胎位を世界に先駆けて発見した人物として知られる（写真 14・写真 15）。

片倉鶴陵（1751 ～ 1822）は相模（神奈川）津久井に生まれた。長じて京都で賀川玄廸の弟子となった。1800 年、『産科発蒙』を刊行したが、これには、オランダの産科図や、イギリスの産科書から採った産科鉗子の図を載せ、日本で初めて産科鉗子の使用法を紹介した文献である（写真 16・写真 17）。

杉田立卿（1787 ～ 1845）は杉田玄白の次男として江戸に生まれ、長じて若狭小浜の藩医となった。西洋眼科を専門とし幕府天文台訳員も兼任した。オーストリアのブレンキが著した眼科書のオランダ語訳を重訳して 1812 年に刊行したのが、『眼科新書』全 6 冊である（写真 18）。

本庄普一（1798 ～ 1846）は本庄（埼玉）の医家に生まれ、長じて諸国を遍歴した後、本庄で内科･外科･眼科を開業した。1829 年、『眼科錦嚢』全 4 冊を刊行した（写真 19）。これと『続眼科錦嚢』全 2 冊は、19 世紀日本の眼科書のバイブル的存在である。角膜・網膜・水晶膜・葡萄膜など現代でも使われている眼科学関係の用語を確立したのは彼の功績である。

華岡青洲（1760 ～ 1835）は紀伊（和歌山）の医家に生まれ、長じて京都で古医方・カスパル流外科などを学び東西の医学に通じた。帰郷して開業。麻酔薬の開発に尽力し、チョウセンアサガオやトリカブトを主成分とした全身麻酔薬「通仙散」を開発した。これを用い、1804 年、全身麻酔による手術（乳癌摘出手術）に世界で初めて成功した。『乳岩辨』は弟子が師の手術の模様を図入りでしたためた写本であって刊本ではない（写真 20）。

平野重誠（1790 ～ 1867）は江戸の武家に生まれた。長じて将軍の主治医多紀元簡に学んだが、官職には就かず、終生、町医として活躍した。1832 年、日本初の家庭医学百科・家庭看護指導書『病家須知』全 8 冊を刊行した（写真 21）。また、1853 年～ 56 年にかけて『軍陣備要　救急摘方』正続 2 冊を刊行し、応急処置の仕方を解説した（写真 22）。

緒方洪庵（1810 ～ 1863）は備中（岡山）生まれ。長じて江戸・長崎で蘭学を学び大坂で開業した。 かたわら蘭学の適塾（緒方塾）を設け、大村益次郎、福沢諭吉らの俊才を多数輩出した。 種痘の普及に尽力し、のち幕府に招かれ奥医師 兼 西洋医学所頭取として活躍した。 コレラが大流行しつつあった 1857 年、オランダの医書から抜粋し翻訳して刊行したのが『虎狼痢治準』である。予防対策などを紹介している。文字だけで図などはない。

まとめに代えて　“温故知新”

以上みてきたように、江戸時代後半は、全国各地の数多の俊才が医学を志し、江戸・大坂・長崎等で研鑽を深め、救命活動を実践して医学・医療の向上に尽力した時期であった。そうした先人たちのたゆまぬ努力の基礎の上に明治維新以降の日本の医学・医療の発展があり、今日の隆盛がある。先人たちの努力の跡に触れ、彼らの労苦を偲び、彼らに感謝の念を抱くとともに、ひいては医学・医療のいっそうの発展への情熱をはぐくむには､｢関場･鮫島文庫｣は恰好の教材である。まさに「温故知新」のための教材である。

おわりに　「関場・鮫島文庫」に関する本学図書館の動向と展望

前述の『関場理堂文庫・和漢医籍目録および注解』の改訂・充実は現在、鮫島名誉教授の手で精力的に進められている。その完成のあかつきには、それを受けて､さらに筆者（藤尾）が『関場･鮫島文庫全解題』（仮題）を作成することとしている。洋書や明治期以降の書籍も含め「関場・鮫島文庫」所収資料のすべてにわたって、サイズ、紙質、巻数、頁数、刊行年、内容梗概、その他をまとめたものとなる予定である。

すでに本学図書館サイトには「関場・鮫島文庫」紹介ページが設けられ､内容も定期的に更新されている。また、折に触れて展示会を実施し、一般公開している。今後ますます回数を増やしていきたい。

この文庫は学内外研究者からの閲覧希望を受付けている。希望日時・閲覧目的などを明記した書類により審査し、図書館職員立会いのもと貴重書室内で閲覧していただくというものである。寄贈者である鮫島名誉教授とのお約束により、館外持ち出しは厳禁としている。学術目的で積極的に活用されることが鮫島名誉教授の願いである。及ばずながら筆者も、医史学者の端くれとして紹介と研究に邁進していきたい。